

二. 言霊思想体现の場としての句会

山下正純

ひるごはんきのうも今日もおそうめん

冒頭の句は「たんば青春俳句」にて優秀句となった小学生の句からの引用である。

お母さんとしては子供に一本取られた、といったところだが、どこの家庭にでもありそうなごく日常的な食卓での一場面である。この句の意を直接解すると、単に「今日もまたおそうめんなの…」という愚痴をこぼしただけになるが、俳句にして切り出してみると、不思議とこの後に「だけど毎日ありがとうお母さん」と言ったほんわかと温かい言葉が聞こえてきそうである。もっとも近しいお母さんだからこそ発せられた自然かつ日常的な交流の言葉ということが言えよう。

前回、「言葉による心の交流」のルーツの一つとして万葉集最後の家持の歌をご紹介したが、その万葉の時代には既に「言霊思想」というのがあった。今更言うまでもないが、言葉に宿ると信じられた霊的な力によって、声に出した言葉が現実の事象に影響を与えると信じられ、良い言葉を発すると良い事が、反対に不吉な言葉を発すると凶事が起こるとされた。従って、このような言葉に対して絶大なるものを感じとる能力は、日本古来よりわたしたちに遺伝的に引き継がれてきたものなのかもしれない。

初句会初顔相手と四つ相撲

さて、そういった言葉による心の交流、特に「もののあはれ」である「滑稽」を共有し合う場として、「句会」を見てみたいと思う。先の句のようにまずもっていつも句会で感ずるのは、心の交流を図る場として、短時間でこんなに深くうち溶けあえる手段は果たして他にあるだろうか、という実感である。通常大人数での職場の懇親会などでは、内面的な交流というより初対面の人とは軽く言葉を交わす顔合わせといった意味合いが強いのが一般的である。しかしながら句会では、物理的な時間としては初対面からわずかであるにもかかわらず、日常の関心事から価値観、人生観まで、相手の持つ個性的と言える様々な人間性を垣間見ることによって、句会が終わる頃には、まるで旧知の仲であったかと思えるほどの距離まで、お互いが近づいていることにいつも驚くばかりである。初顔合わせのお相手とがっぷり四つといったやりとりも、人からいただいた人爵や老若男女を越えての四つ相撲が実現する句会ならではの醍醐味と言えよう。こういった実感から句会においては、まちがいなくお互いが合わせ持つ「滑稽」を十二分に共有し共感できているのではないかと思う次第である。

(続く)